

第3回足立区総合教育会議

日 時 平成27年7月23日(木)午後2時開会
場 所 足立区役所8階 特別会議室

中村政策経営課長

それでは、皆様おそろいでございますので、ただいまより平成27年度第3回足立区総合教育会議を開催させていただきます。

私は、本日司会を務めさせていただきます政策経営部政策経営課長の中村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、会議の運営についてでございますが、本会議は公開を原則としまして、会議録はホームページ等で公開させていただいております。また、会議録作成のため、皆様のご発言については録音をさせていただいておりますので、ご了承いただきたいと思います。

それでは、議事に入らせていただきます前に、お配りした資料について確認をさせていただきます。

まず、1枚目が次第、A4、1枚でございます。その後ろに名簿と席次表を添付させていただいております。

資料1といたしまして、A3判のホチキスどめ、足立区教育大綱(案)資料1-1、2枚目が資料1-2となっております。

続きまして、資料2が、教育大綱策定に伴う意見収集先関係機関一覧(案)でございます。

資料3が、今後の議事日程(案)でございます。

資料4が、第2回総合教育会議の議事録をつけさせていただいております。

以上でございますが、お手元に資料はおそろいでございますでしょうか。よろしければ、以降の議事の進行は区長にお願いいたします。

近藤区長

お忙しいところありがとうございます。今後、さまざまな関係団体の方から教育大綱の原案についてのご議論、ご意見をいただくような状況にもなっておりますので、今日はちょっと時間はかかるかもわかりませんが、教育大綱のメインのところと、それぞれの世代別の理念についてご意見を頂戴して、各団体の皆様にお示しするたたき台の部分まで何とかたどり着きたいと思っております。

1. 教育大綱(案)の検討について

近藤区長

まず、教育大綱(案)の大きな理念のところでございます。ここは、まず大きな見出しを2つつけさせていただきました。「誰もが子どもを支える主役」と「貧困の連鎖を断ち切るのは教育」という2つに分けて、大綱の大理念のところを整理したということが1点と、後から私が読み上げさせていただきますけれども、教育の使命は何かというところを文部科学省のホームページ等から、足立区でも教育の使命は学校だときちっと書いたほうがいいのかということ、それから、使命の中に「学び」続ける意欲というのがございますので、では、学びとは何かということも書かせて

いただいております。

そして、今日、一番皆様方にお考えいただきたいのは、学びとはすなわち「生きる力」ということを国は言っているわけですが、国は、確かな学力、豊かな人間性、健康と体力を「生きる力」に位置づけているということでございます。そうしますと、健康と体力はちょっと横に置いておきましても、確かな学力の「学力」と豊かな人間性の「人間性」、こういった意味について、区としてどのように考えるかということをごどこかにきちっと定義する必要があるのではないかと考えるわけでございます。そうしますと、教育大綱の中で定義づけるのが一番据わりがいいのかなと思うのですが、今のところ原案にはそういった内容はコメントしてございませんので、その辺を文章を読んだ後にご議論いただきたいということと、それを受けて、2枚目でございます世代別の理念のところを、今までご了解いただいておりますように、世代を乳幼児期、青少年期、成人期の3段階に分けてそれぞれのテーマを掲げて、それぞれがどういう時期だという考え方、定義を置き、その時期に応じて求められる力を身につけてもらうために、区としてどういう取り組みを進めていくのかという2段階構えで書かせていただいております。そこまでが大まかなところでございます。

まず、「足立区教育大綱(案)～夢や希望を信じて生き抜く人づくり～」をサブタイトルにしてございます。読ませていただきます。

誰もが子どもを支える主役。教育大綱は、これからを生き、将来社会の支え手となる子どもたちをどのように育てあげるか、という区の教育に関する基本的な姿勢を示すものです。教育の使命は、「学び」続ける意欲を喚起し、社会的な自立と自身の幸福を実現できる人となりますが、私個人的には人より力がいいのではないかと考えるのですが、人を育むことにあります。ちょっと補足させていただきます。ここで言う「学び」とは、すなわち「生きる力」を身につけることを意味します。括弧の中に書いてある部分については、少し説明しないと理解いただくのが難しいのではないかと、とりあえず削除させていただくという意味で括弧内に入れさせていただきました。

培われた力が個人に留まることなく、次世代の子どもたちの成長を促す力として活用される循環を生み出すことが重要であるということで、これは前回のときにお示しした足立で成長したお子さんが大人になって、将来的には自分が学んだことを子どもに還元する。つまり、子どもを育てていく支え手として、例えばボランティアですとかいろいろな機会があると思っておりますけれども、そういう形で力を尽くしていただく、そういう循環をつくっていくということが足立として重要だというふうに位置づけるわけです。そこで1つ問題なのは、どうしてそれを重要だと考えるかという理由を入れるべきではないかということで、今括弧内に書かれていることを入れているわけですが、これもなかなか意に沿わないといいますが、これが本当に理由としてふさわしいのかということになりますので、ここもただ単に重要だと言い切ってしまうだけでいいのか、重要だと区が考える理由を入れ込むのかということをご議論いただきたいと思っております。

これらを実現していくために、家庭・学校・地域のみならず、あらゆる社会資源が連携を密に、総ぐるみで子どもを支え、育てあげていく仕組みを整えてまいります。共有できるというのは、共有

できる仕組みを見つけるわけではないので、入れるとするならば、育て上げていくという共通の意識のもとで、意志が共有できる中で、そういう仕組みを整えていく、ということになるかと思いません。

先に進みます。貧困の連鎖を断ち切るのは教育。治安・学力・健康といった区のボトルネック的課題に深く関わり、負の連鎖を生み出す元凶となっている「貧困」。特に深刻な、世代を超えて連鎖する貧困を断ち切る唯一の手段(すべ)は「教育」です。自身が将来に夢や希望を見いだせないといった厳しい環境にある子どもたちに対しては、そこから脱出し、自立して生き抜く力を育むことのできる様々な機会を提供します。自己を肯定し、夢や希望を信じて生き抜く人づくり。これが区の教育の原点です、ということなのですが、先ほど申し上げたとおり、確かな学力の定義ですとか、豊かな人間性の定義といったものをこの間に入れ込んでいくのか、または別に書いていくのかということをご議論いただきたいと思うのですが、小川正人先生、いかがでしょうか。

小川(正)委員

基本的には、言おうとしている中身自体はいいと思うのですが、ただ、先ほど言われたように、例えば「生きる力」とはどういうことかとか、確かな学力とはどういうことかということを経典的な理念の本文の中に全部入れ込むとなると、読みづらかなかも感じます。「生きる力」とか「確かな学力」というのは、一般の方、区民にはなかなかわかりづらいものもあるので、そういうポイントとなる重要な用語については欄外に簡単な用語説明をすることで、本文自体をもっと簡潔にするというような書き方もあるかと思えます。

例えば、確かな学力というのは、国レベルの学校教育法の中に規定されていて、基礎、基本と、活用、探求で育む思考力、判断力、表現力、あと、自発的に学ぶ意欲、そういった要素をトータルして確かな学力と表現しています。区民には確かな学力といっても、実際どういう中身かということとはなかなかわかりづらいので、欄外に重要な用語説明ということで記載したほうがいいのかと思います。

近藤区長

そのときに、足立区の独自性をその中に入れるか入れないかですね。文部科学省のホームページにある確かな学力をそのまま書き写すので事足りるかどうかということは、またちょっと考えなければいけないと思うのですけれども。

小川(正)委員

でも、下の文章とか貧困の連鎖を断ち切る、このあたりに足立の教育の基本施策の大きな考え方は十分あらわれていると思います。

近藤区長

そうですか。私たちはなかなかほかと比較ができないものですから、そういうふうなコメントをいただければと思います。

小川（正）委員

恐らく、全国の自治体で教育大綱をいろいろつくると思いますが、これくらい貧困の問題を意識して教育大綱をつくる自治体というのは、それほど多くないと私は思っています。

近藤区長

もう1つ伺いたかったのは、成長した方々が、また次世代の子どもたちの教育に関わって支えていただきたいという循環をつくっていきたいということなのですが、この辺のことは理由もなく重要だと言い切ってしまうのかどうか、足立だから必要とされているのか、それとも他の自治体でもそういうふうに考えているわけですか。

小川（正）委員

この辺は、共生とか持続可能な社会ということで、こういうふうな考え方自体は、ほかの自治体を含めて一般的に共有されつつある考え方だと思います。

近藤区長

では、足立独自の固有な理由で重要だと考えていると言う必要もないですか。

小川（正）委員

この辺のところは世代別理念には丁寧に書かれています。特に成人期のところに記載されていますが、区長が強調して書きたいというのであれば、私はあえてここは反対しません。

近藤区長

反対も含めておっしゃっていただければいいのですが、循環を生み出すことが重要だということで事足りますでしょうか。

小川（正）委員

つまり、子どもの置かれた環境によらず、個の力を伸ばす云々というところは省くという意味ですね。これは少し考えさせてください。

近藤区長

では、一旦おきます。ありがとうございます。

それともう1つは、自己肯定感という言葉です。一番最後に「自己を肯定し」というふうに出てくるのですが、それ以外には入っていないのです。だから、「自己を肯定し」をどこに入れ込むかということになるのです。例えば、「教育の使命は、「学び」続ける意欲と自己肯定感を喚起し」という言い方でも、ここに入れることでいいですか。

小川（正）委員

いいですね。あと言葉自体も、人によってどういう用語を使用するかはいろいろありますが、私は、自己効力感という用語をしています。

近藤区長

役に立つ効力感。

小川（正）委員

この前、子ども貧困対策検討会議の委員の志水さんと話をしたときも、志水さんは有用感だったか、人それぞれ使い方が……。

近藤区長

どれを使うかによって、1回使ったらそれでずっと通さなきゃならない部分もあると思うのです。

小川（正）委員

私は、自己効力感を使います。つまり自分が社会を、身の回りを変える力があるという、それを認識することで自分が社会に役立っている充足感という意味で、自分と生き方を社会的な文脈の中で肯定し見通していく能力という意味で使っています。

近藤区長

それでは、どの言葉を使うかというのはこれからまたご相談しますが、「教育の使命は、「学び」続ける意欲と自己肯定感、自己効力感を喚起し」という形で入れさせていただくことでいいでしょうか。

（「はい」との声あり）

近藤区長

あとは、下の「原点」までの中でご議論はないでしょうか。

定野教育長

「誰もが子どもを支える主役」と「貧困の連鎖を断ち切るのは教育」と、2つの見出しにしたのは非常にわかりやすくなって、私はよかったですと思います。ただ、貧困の連鎖を断ち切るのは教育だけではないので、頭に、「教育は」貧困の連鎖を断ち切るとか、「教育で」貧困の連鎖を断ち切るとしたほうがいいかなというのが1つです。断ち切るというのが述語になると、上が主役で終わっているのは変なので、「誰もが主役となって子どもを支える」と統一感を持たせて直したらどうでしょうか。

近藤区長

そうすると、唯一の手段（すべ）と言ってはまずいわけですね。

定野教育長

私はそういう気がするし、子どもの貧困対策本部でも教育だけではないとしていますから。

小川（正）委員

私もそれは気になっていて、唯一の手段（すべ）というのは、ちょっと教育に対する過大評価というか。

定野教育長

そう思っていますけれども、でもそうは書けないなと。

小川（正）委員

教育にはできないこともあるので、教育のほかにいろいろな……。

近藤区長

有効な手段の1つとかですか。

小川（正）委員

そうですね。そのほうがいいと思います。有効とか、重要とかですね。

定野教育長

教育を頭にして、貧困の連鎖を断ち切る重要な手段の1つですと書かなくてもわかると思うのですけれども。

近藤区長

重要な手段ですと。

では、また見出しについてはこちらでも議論させていただきます。ここまででほかには。

花岡委員

「教育大綱は」の下の「教育の使命は」の後ろのほうですが、「社会的な自立と自身の幸福を実現できる人」ないし力ということですが、この「自身」を「自他」に変えたほうがいいのではないかと。コミュニケーションとか、対話とか、ともにという含みを込めて、自分だけでなく、他の幸福を願って、自他共に幸福になることが大切だと思うのですが。

近藤区長

本当にそうだと思います。よろしいですね。人と力はどちらがよろしいでしょうか。細かいところで恐縮です。

定野教育長

やっぱり力かなと思います。

近藤区長

力だと思いますね。

ほかに、職員の方もどうぞ遠慮なくおっしゃってください。

小川（清）委員

先ほど、小川正人先生が「生きる力」というところを本文の中でない部分でちゃんと説明したほうが良いとおっしゃっていたのですが、私は、やっぱり本文の中に入れ込んだほうが良いと思うのです。「生きる力」について、こうこうと3つあるのを何とかうまく本文の中に入れ込んだほうが読みやすいと思うのですが、いかがでしょうか。「生きる力」だけでは絶対にだめなので、きちりとした説明というか、こういうことだということをここで言ったほうが良いと思うのです。

近藤区長

そうすると、どの程度の長さになるかということも含めてですね。

小川（清）委員

本当に細かいところまで言う必要はないと思うのです。だから、さわりというのも変ですけれども、括弧でもなくて、何か本文の中に入れたいと思います。

近藤区長

今すぐというわけにはいかないでしょうけれども、それぞれの委員の先生方に「生きる力」についてのイメージとか、こういうふうには書き込んだほうがいいのではないかというようなアイデア、アドバイスがあれば、メールでも何でもいただければと思います。それによって、また、中に入れるか、外出しするのか、もしくは両方やるのかということもあると思うのです。さらに詳しく補足をするということもあると思いますので、そこは改めて。

では、これから説明の内容によってということですが、大まかな文章については、今修正していただいたところでよろしいでしょうか。

(「はい」との声あり)

近藤区長

では、そのようにさせていただきます。

世代別理念についてです。ここもぎりぎりまでやりとりしていたものですから、まだ文章が生煮えのところがございます。ご指摘いただきながら進めていきたいと思います。

まず、乳幼児期でございます。「様々な出会いやかかわりを通じて、たくましく成長するための素地をつくる」が大きなイメージでございます。さらに「ふれあう喜びとを感じる心」、生涯にわたる人間形成の基礎を養う大切な乳幼児期。子どもたちは、密接にかかわりを持つ大人たちの深い愛情、出会い、かかわりを通じて、自己肯定感を少しずつ着実に育む時期です。そこで、経験を通じて、豊かな感性や意欲を育み、成功体験を自信に変えていける環境をつくるとともに、基本的な生活習慣をしっかりと身につけ、学びの基礎を固められるよう取り組んでいきます。そのために、家庭、保育園・幼稚園・こども園、地域等が互いに子どもたちを支え、見守りながら、心も体もたくましく育てていける仕組みづくりを進めてまいります。

まず、乳幼児期とはこういう時期ですという定義についてですけれども、小川清美先生いかがですか。

小川(清)委員

全体的にはいいと思います。

近藤区長

先生、乳幼児期で一番重要なのはどのあたりになりますか。

小川(清)委員

1行目の終わりから2行目の「密接にかかわりを持つ大人たちの深い愛情、様々な出会い、かかわりあいを通じて、自己肯定感を少しずつ着実に」というか、「自己肯定感を育む時期です」で私はいいと思うのです。

近藤区長

ただ、先生、ほっておいても自然に自己肯定感が育まれるわけではないので、そういった育めるような環境整備をしていく必要があるということですよ。

小川（清）委員

そういうことです。ですから、ここで大人、それから環境、場 人間と物との環境の両方が必要なので。

近藤区長

先生、物というのは何になるのですか。

小川（清）委員

物的な環境ですね。子どもがいる環境、自然もありますし。

近藤区長

育つ環境ということ。

小川（清）委員

自然環境も大事ですし、ですから、物的な環境と人というのが大事になってきますけれども、どちらかだけではだめなので、両方必要なのです。

近藤区長

そうすると、このコメントですと、人間のことは書いてあっても物的環境という書き方というか……。

小川（清）委員

「様々な出会い、かかわりあい」というところで、必ずしも人だけではないと私は読みました。

近藤区長

それを少し強調できるように、ご理解いただけるように書き方を工夫してみます。

2段目は、自己肯定感を育むための具体的な手段を書きたいわけですが、それについてはいかがでしょうか。この辺は私も全く素人なものですから、「様々な経験を通じて、豊かな感性や意欲を育み、成功体験を自信に変えていける環境をつくる」と書いてあるわけですが、

小川（清）委員

環境をつくるというよりは、環境があるからそこでさまざまな体験ができる。

近藤区長

多分、環境と言っているのは、成功体験を自信に変えていける環境だと思うのです。

小川（清）委員

この場合は、環境という言葉はここでは使わないで、ほかの言葉に言いかえたほうがいいのかと思うのです。環境というと、本当にいろいろな捉え方をされますので、「できる喜びを自信に変えていけるように」というぐらいでも大丈夫だろうと思うのです。

近藤区長

自信に変えていくように環境を整えちゃまずいわけですね。

小川（清）委員

そうですね。環境は用意されていて、そこで子どもが出会って、そして、さまざまな経験を通じて

といくので、そういう意味では環境はもっと前にあったほうがいいのかと思います。

近藤区長

それともう1つ、就学前の重要なところということで、基本的な生活習慣を身につけることが学びの基礎を固めることにつながっていくということで、これは基本的な生活習慣を身につけると入れています。ただ、私自身、もう少し書き込めるのではないかなと思いますのは、家庭、地域、園が互いに子どもたちを支え、見守りながらだけでいいのかということなのです。もちろん、支え、見守ることなのですけれども、もう一步、二歩踏み込めるようなコメントもあっていいのか、ただ、それを言い切ってしまうのかということはありません。

小川（清）委員

もうちょっと踏み込んだというどのようなイメージでしょうか。

近藤区長

既にこういう状況は今もあるものですから、物足りなく感じられる方もいらっしゃるのではないかと思います。

小川（清）委員

言葉としてはあっても、具体的に支え、見守るのはとても大変なことなので、多分、十分にできていない部分があると思います。支え、見守るのは、方法として一番難しいことなのです。支え、見守るということは、結局必要なときに手をかすということなので、要らないときは手を出す必要はないのですね。おせっかいになってしまうので。ですから、その部分を支え、見守るというこのやり方は本当に難しいところなのです。でも、これが乳幼児期の親子にとって一番大事なところなのです。

近藤区長

わかりました。最初、見守りしか入っていなかったのですけれども、支えを入れてということですから。なかなか難しいご指摘ですけれども、またご趣旨を体しながら、たたき台をつくってお送りしたいと思います。

それでは、青少年期に移ります。「ともに歩み、磨きあいながら、自身の道を切り拓く力を培う」ここで養うと培う、これを使い分ける必要があるのかと思うと、少し言葉を引き締めていく必要があるというか、定義を考える必要がある。無意識にここで使われていると思います。

「確かな学力と豊かな心」、社会人に向け自立する力を培う青少年期。旺盛な好奇心のもと、希望や意欲を持って行動し、様々な経験を重ねる中で、基本的な知識やそれを活用できる思考力、コミュニケーション能力を養う時期です。そこで、子どもたちが将来の夢や希望の実現に向け、広い視野や考えをもつために、多くの友人たちと切磋琢磨し、学校や地域活動などを通じて、多様な人々とかかわることのできる環境整備を進めていきます。また当然のことながら、子どもたちが生活環境に左右されることなく、同じスタートラインに立てるよう平等な機会を提供していきます。その上で、自ら学び、考え、課題を克服し、自らの手で夢や希望を実現し、人生を切り拓く力を身につけるため、学校、家庭、地域の教育機能を相互に生かせるよう、より連携を強めていきます。

「子どもたちが生活環境に左右されることなく、同じスタートラインに立てるよう平等な機会を提供」と、秋生部長、今回の貧困対策も含めてこのあたりはどうですか。

秋生総合事業調整担当部長

基本的には、環境を整備する、同じスタートラインにということですが、同じです。

近藤区長

同じスタートラインというのは可能なのでしょうか。

秋生総合事業調整担当部長

機会の均等という意味で使っているのであれば。

近藤区長

そうすると、また「平等な機会」と2つあるわけです。同じスタートラインに立てるよう平等な機会を提供というわけです。

秋生総合事業調整担当部長

そういう意味では重なっています。

小川（清）委員

最初のスタートラインの前の「平等な」を消せばいいと思います。「子どもたちが生活環境に左右されることなくスタートラインに立てるよう平等な機会を提供していきます」でいいと思います。

近藤区長

わかりました。1カ所でいいわけですね。

ここは、学校教育のほうはいかがでしょうか。小川正人先生、いかがですか。

小川（正）委員

私は、短い文章の中に非常に重要なポイントが要約して書かれていてよくまとまった文章だと思っています。

近藤区長

基本的な知識という言葉がいいかはあれですけども、それを活用できる思考力、コミュニケーション能力の3つでよろしいですか。

小川（正）委員

私は、さっき言ったような学力の3要素の最もエッセンスになったところをこれで表現しているのでいいと思います。

近藤区長

基本的な知識やそれを活用できる思考力、コミュニケーション能力、ここに括弧して、イコール確かな学力と書いておけばいいですか。

小川（正）委員

いや、あまりごちゃごちゃしていないほうがいいと思います。

それと先ほどの、私自身は言葉とすれば「培う」のほうがいいのかと思います。他者と主体の両方重

なって自分の力を育てていくという意味合いが「培う」の中にはあるような気がするので、「育む」よりも「培う」の言葉のほうがいいのではないかと思います。3行目「養う時期です」も「培う時期です」にしたほうがいいのかもかもしれません。

近藤区長

そうすると、ほかの部分にも出てきておりますので、大理念のところも含めて整理させていただきます。学校教育のほうからは何か青少年期についてありますか。乳幼児期のところでも結構です。

宮本学校教育部長

特にありません。

伊藤子ども家庭部長

今、社会教育委員会の中で議論されているというか、キャッチフレーズとして使いたいのが、第3の大人と出会う。要するに、家庭で出会う親が第1、学校で出会う先生が第2、それ以外の大人たちと関わりを持つということは非常に大きな課題だろうと。今、この機会が青少年期の子どもたちには少なくなってきたのではないかということで、ここにある、多くの友人たちと切磋琢磨し、学校や地域活動などで多様な人々とかかわりあいを持つということは、非常にその議論と合致するところだと思います。

近藤区長

ありがとうございます。第3のと入れる必要があるということですか。

伊藤子ども家庭部長

少し聞きなれない言葉なので、こういうところではあまり使わないほうがいいのかと思います。

近藤区長

ありがとうございます。

教育次長はどうでしょうか。

山本教育次長

表現しようとしているトーンはこれでいいと思います。

近藤区長

それでは、成人期に参ります。自ら学ぶとともに、その経験を社会に還元する意欲を育てる。「学びの成果を生かす」社会的・経済的に自立する成人期。これまで積み重ねてきた自身の幅広いキャリアを生かしながら、地域社会の支え手として、学びの成果を社会生活や地域づくりなどに還元し生かす時期です。そこで、社会人になっても 次の、自らの生きがいや自己実現を図るために、これはちょっと括弧にさせていただいて 学び続けられる様々な機会や場を提供するとともに、子どもたちの未来のために地域の支え手として活躍できる環境整備も進めてまいりますということではいかかと思うのです。つまり、学校を卒業したら学びが終わるのではなく、それからもご自身の意欲で常にさまざまな場や機会、人との関わりを通じて学び続けられるような場所を提供していくということが1つと、自分たちがそうしてもらったように、ぜひ、次世代の子どもたちのために

も支え手として活躍してください、そういう場もつくっていくということを区の考え方として入れ込んでいるわけなのですけれども、そうすると、社会人になっても学び続けることの「自らの生きがいや自己実現を図るために」というのは、何かここに学び続ける理由を入れ込むかどうか、それともそれぞれの意思でというようなことでさらっといくかどうかですね。生涯学習の部分に関わってくるので、少し書き込む必要はあるかもしれません。

生涯学習に関わっているので、地域のちから推進部からは何かありますか。

井元地域のちから推進部長

自己実現というのが、少し自分のためというような印象があるので、生涯学習だとそうなのでしょけれども、社会を支えるということを強調していったほうがいいと思うので、何かこれは違和感がある言葉だと思います。

定野教育長

多分、自己実現は要らないのだろうと思うのです。ただ、生きがいを持ってもらいたいなという気持ちはあるから、「社会人になっても生きがいを持ち、学び続けられる様々な」とつなげたらどうですか。大人になっても生きがいはやっぱり持っていてほしいと思うので、自己実現まではいいなと。

それからもう1つ、「学びの成果を生かす」と成人期だけ上と違うのです。「確かな学力と豊かな心」「ふれあう喜びとを感じる心」、ここも例えば学びの成果と子どもの支え手とか、何か語呂合わせがないかなと思って。

近藤区長

何かと何かの語呂合わせですね。

小川（清）委員

最後の「環境の整備も進めていきます」、確かに整備を進めていくのですが、言葉としては、例えば仕組みとか。整備は余りにも具体的過ぎるといふか、この文章の中には合わないと思ったのですが、いかがでしょうか。

定野教育長

「活躍できる仕組みづくりも進めていきます」と。

近藤区長

ありがとうございます。

では、文章についてはよろしいでしょうか。ご意見を体しまして十分に推敲させていただきます。

長谷川政策経営部長

行政計画としては、かなり思いの詰まった内容かと思えます。ただ、1つ感じるのは、これはこれで行政計画としてつくって、足立区の教育の一番根本のものなので、これを例えば小学生とか子どもたちに伝えられるようなメッセージ版を、例えば教育大綱のお話とか、やっぱり足立区の教育はこういふのだと理念は理念としてあるのですけれども、これをかみ砕いた形で子ども版のものを1

つつくっておくというのもいいのかなと。子どもたちに対して、足立区は皆さんをこういうふうにしたいと思っているというものを別バージョンでも考えたらどうかと思いました。

近藤区長

漫画とかで。わかりました。それは素材ができて、また検討していきたいと思います。

では、文面についてはよろしいでしょうか。ありがとうございます。

2．意見収集を行う団体について

近藤区長

それでは次に、議題2、意見聴取を行う団体について、中村政策経営課長、ご説明をいただけますか。

中村政策経営課長

それでは、資料2をご覧くださいと思います。本日が第3回の教育会議でございますけれども、第4回、第5回にこの教育大綱に関しまして、関係団体から意見をいただきたいと考えてございまして、その案でございます。ライフステージを3つ考えてございまして、乳幼児期、青少年期、成人期に関わっていただいております関係団体をお呼びしたいと考えて、こういった案をつくらせていただきました。2日間ということもございまして、今事務局で考えていますのは、時間は区別いたしますけれども、乳幼児期と成人期を初日に、青少年期を2日目にという2回の構成で考えてございます。ご覧いただいております団体名につきましては、おおよそこういった団体の代表の方に来ていただいて、さまざまな活動ですとか、ご意見を頂戴するのが適当かということここで選ばせていただいております。こういった団体に関しまして、もし、ご意見があったら頂戴したいと考えております。よろしくお願いたします。

小川（清）委員

保育施設、幼稚園両方に関連するのですが、ここにはないのですがこども園はどうなっていますでしょうか。区立こども園はあるのは知っているのですが、まだ私立幼稚園のほうで、こども園化になっているところがあるかどうか確認できていませんが、全国的には随分増えてきているので、両方あわせ持ったこども園というところも、代表者が一体どなたかというのは私もわからないのですが、ここに入れていただいたほうがいいのかと思います。

中村政策経営課長

関係機関の保育園、幼稚園でございますけれども、例えば幼稚園関連の私立幼稚園協会にはこども園が含まれております。公立の場合は、保育施設関連のほうの区立保育園園長会にこども園が含まれておりますので、そこのご意見もこの中で頂戴できればと考えています。

小川（清）委員

わかりました。

近藤区長

ただ、中村政策経営課長、この理念の中でみんなが主役と言っているわけですよ。学校、家庭、地域、誰もが。そうすると、学校の代表者、家庭の代表者は入っていても、地域の代表者、ボランティアですとか、個人というか区民として子育てに関わっていただいている方が抜けているような気がするのです。例えば、放課後子ども教室をやっていただいている方ですとか、さまざまな角度から、つまり自分たちもこの大綱づくりに参加したという参加意識を持っていただくことが、まさにみんなが主役という素地をつくっていくわけで、つくるときから言っていることとやっていることが違うのでは大変なことになってしまいますので、これを基礎でやっていただくのは結構なのですが、もう少し地域の部分を入れ込む形はいかがでしょうか。そういう形で考えていただきますように。

小川（正）委員

私も今の区長の意見に賛成です。特に青少年期のリストを見ると、今おっしゃったように学校関係者だけなので、地域というのは足立の学校づくりにとってはこれからのキーワードなので、開かれた学校づくり協議会とか、今お話があった放課後子ども教室、そういう団体もぜひ入れていただければと思います。

近藤区長

せっかくご意見をいただく機会を設ける以上は、間口を幅広くしていただきますようにもう少し考えてください。

中村政策経営課長

1つ説明が漏れておりましたけれども、開かれた学校づくり協議会について、協議会の代表というのが見当たらない、そういった組織づくりになっていまして、そのために開かれた学校づくり協議会の方々にこれをお示ししながら、別の形でご意見いただければというふうに今事務局で考えております。

近藤区長

では、そういうことも含めて一覧表にさせていただきたい。地域の方なども、この中に必ず入れ込んでください。

中村政策経営課長

わかりました。そうさせていただきます。

橋本福祉部長

もしそうだったら主任児童委員も考えてもらえればと。

桑原委員

増えちゃうばかりで申しわけないですが、せっかく6大学なので、大学が入っていないというのもちょっと気になりました。

大高衛生部長

健康面についても理念の中に入ってきますので、例えば学校歯科医であったり、学校医であったり、そういった健康面のサポートをしている団体の方をというのが1つ。それから、最終的に自立した成人を育み、育てるということを目標とするならば、例えば労働力の需給サイドの、こういった労働力が必要なのか。例えば足立の子どもたちは大体足立で育ち、足立で学び、足立に就職するみたいなパターンが多いですから、そういった際にどういう技能、知識、知見を持っている人が産業界としては望ましいのだというような声も、1つ取り入れたほうがいいのではないかと思います。

近藤区長

地域のちから推進部からは何かありませんか。いろいろ関わっていらっしゃる方はそちらが一番多いような気がします。

井元地域のちから推進部長

例えばNPOだとか、ボランティア団体とか、また、子育てに関わっている方はたくさんいらっしゃるので、そういう方々のお声は聞いてみたいと思っております。

近藤区長

開かれた学校づくり協議会の代表がないという話ですけれども、逆にそちらのほうから、ここが代表でお願いしますというふうにお願いただければ済む話ではないでしょうか。

宮本学校教育部長

開かれた学校づくり協議会については工夫して意見を聞くようにします。

長谷川政策経営部長

例えばこども教育委員会とかあるじゃないですか。子どもたちの当事者の声を聞くというのも、理念系なのでどこの学年までできるかわからないですけれども、こういうのはやっぱり当事者の意見を聞くというのもありなのかなと思うのですけれども、具体的にどうですか。中学生とかは難しいですか。

宮本学校教育部長

もし聞くとしたら、先ほど政策経営部長からご提案があった子ども版を示さないと多分わからないのかなというところです。

近藤区長

ご意見として、これから必要かなということはありませんね。周知をしていくに当たって、ご意見をいただいたり、また、ご意見で内容をつけ加えていたりすることがあるかもわからない。関係の意見聴取先については、もう少し間口を拡大していただくということで、改めてお諮りしたいと思います。

3、協議・調整事項

近藤区長

ここまでのところで何かございますか。よろしいでしょうか。これまでの総合教育会議は、主に教育大綱の策定に時間を割いてまいりましたが、今後はさまざまな課題についても意見交換をしていけたらと考えております。

1つ、私自身、課題と考えていた小中一貫校の問題につきましては、10年の区切りとして検証を教育委員会のほうでしていただけると伺いましたので、また、国のほうでも考え方に動きがあったようですので、この機会にぜひお願いしたいと思います。

もう1つは、これからご議論いただきたいのは、オリンピック後のレガシーについて。これはまちづくりの面でもいろいろ議論は進んできておりますが、特に教育委員会としての子どもたちの教育現場でどうするかということについては、学校の校長先生等のお話も伺いながら、少しご議論をмонでいただいでご提案いただければ大変ありがたいと考えております。それは改めてご意見を伺わせていただきます。

今日は、1つテーマとして、給食を情報提供させていただこうと思います。平成20年においしい給食担当課というものができてから丸6年が経過しているわけで、もう既に取り上げられるところは全て取り上げられたかと思っていますと、おととい取材があったりということで、永遠のテーマなのかなと思っています。この間の取り組みの成果と現状、今後の課題について少し意見共有をさせていただいて、また何かご意見、ご要望をいただければということで資料を用意いたしましたのでごらんいただきたいと思います。

説明は望月課長からお願いします。

望月学務課長

ご覧になっていただくと、小学校の残菜の平均値ということで、足立区は全校統一の残菜の計量方式で計量して毎日平均値を出しております。これは平成20年からですけれども、さきほど区長が申し上げたように、平成20年当初、小学校については9.0%から順調に推移して、現在は3.1%まで残菜が減っております。続きまして、中学校は当初14.0%だったのが、毎年順調に減っております、現在7.1%まで減っているところでございます。

特徴的な学校について説明申し上げます。まず、小学校は全体的にどこの学校も順調に残菜率は減っています。このグラフの点線が小学校の平均残菜率です。実線がその学校の実際の残菜率、左側のグラフの小学校につきましては、学校全体で残菜を減らそうという取り組みがしっかりできて、配膳時にも教師が給食の配膳を手伝ったりして、声かけを行うなどしてやっている関係で、現在、26年度は0.6%まで減っているところでございます。右側のグラフの小学校につきましては、平均値は25年7.9%まで増えていますが、これは25年に新人栄養士が配置されたことにより、一時的に残菜が上昇しました。その後、学校全体で給食栄養士に対する育成、協力体制の取り組みができて、26年5.8%、そして今年度現在、3カ月過ぎた段階で5.0%ということで、今後の減少が見込まれる

という例でございます。

続きまして、中学校でございます。左側の上のグラフの中学校は、大規模校なのですが、非常に生活指導がしっかりできていますので、点線より下を見ていただくと、実線が平均より毎年下がっているという例で、給食についても学校全体を挙げて残菜の減少に取り組んでいるという例でございます。そして、右側の上のグラフの中学校につきましては、栄養士が非常に給食に対して熱心で、学校もそれを後押ししている。そして、毎年、給食甲子園というのがあります。それに応募している栄養士ですので順調に減っております。今年度も現在で4.5%ということでございます。左側の下のグラフの中学校は、今一番残菜が多い学校でございます。学校全体にやや落ちつきがない。最近は少し落ちついて、今年度は11.1%まで下がっておりますが、やはり給食指導にまで力が回らないという状況でございます。右側の下のグラフの中学校につきましても、25年度が産休代替の栄養士ということで1年間限り、そして、26年度は新人の栄養士ということで、1年ごとに栄養士がかわっている状況です。やはりそういう状況ですと、なかなか残菜の減少までいかないということで、それについては当課の課題と考えて栄養士が巡回等をして減少に取り組んでまいりたいと思います。

資料の説明は以上でございます。

近藤区長

実施してから6年たってまいりまして、今年の春のおいしい給食推進委員会の栄養士等からもいろいろな意見が出ました。まず、新人栄養士について、単なる座学の講座、講習だけでなく、かつて行っていた実習タイプで研修を行ってほしいというご要望がありましたので、今年の夏休みに実施する予定でございます。ただ、ベテランの栄養士からは、かつてはさまざまな研修に行ったときに、ベテランの人との交流の中でいろいろ学ぶことができた。自分たちは、なるべく若い人たちに教えていきたい気持ちはあるけれども、逆に昨今の風潮の中でそういったものをあまりよしとしないというか、嫌がる傾向の人も多いような、技の継承にかなり難しい面があるというようなお話も出ていました。ただ、非常に栄養士たちが喜んでいまして、この事業が始まって、各学校、特に校長先生の意識が変わり、食育について意欲的に取り組んでくださる学校が増えたということで、自分たちも積極的に食育に関われるようになったという、栄養士自体の意識改革が進んでいるということも非常に印象に残った点でございます。

残念ながら、まだ高止まりしている学校もありますが、これも栄養士が言った私にとって印象的なコメント発表だったのですが、学校が荒れるようになると、クラスが荒れると途端に残菜量上がる。ですから、クラスの荒れ、学校の荒れというものを、時間をとって食事をじっくり食べさせる、給食から学校または学級の立て直しを図っていくということは有効なのではないかというコメントも出ておまして、確かにと思いました。小学校に比べて中学校の場合は給食時間が短いということも大きな課題でもございますので、特になかなか落ちつきが取り戻せない学校等については、そういった栄養士の考え方を取り入れていくことも今後必要なのかなと思っておりますけれども、

全体的には今年も順調に推移しているということです。家庭で栄養のバランスを考えたり、でき合いでない手づくりのものが食べられる機会が減っている家庭が多かったりということですので、大人の3食のうちの1食分よりも、さらにこの学校給食の重要性というのは重いと思います。ぜひ、これからも教育委員会のほうでもバックアップしていただいて、新人の栄養士の対応ですとか、なかなか厳しい対応の続いている学校等にはてこ入れをしていただいて、なるべく広範囲の学校で、残菜が少なくなっているところの取り組みを、これからも進めてまいりたいと思います。

頑張っているところもあるけれども、相変わらず高どまっているところもあるというような現状について認識していただきたいと思ひまして、資料としてご紹介させていただきました。どうもありがとうございます。

花岡委員

残菜についてですが、1つの例ですが、自分の経験として、学校栄養士の思い、意識とそぐわないかもしれませんが、中学生になると、男子生徒もそうですが、特に女子生徒は少食だったり、思春期でダイエットのために食べないということがあるのかなと。そうすると、配膳のときに最初から少な目に食べられる量をもらっておけば残菜は少なくなるかと。学校栄養士の思いというのは、全員に同じカロリーを摂ってほしい、成長に伴うもので必要なのだということで、大事なことだと思うのですが、子どもにとってははじめから食べられないものを全部もらって、それで残すのがいいのかどうか。学校の課題というのは個々に違うと思うのですが、その辺の指導の工夫も1つあるのかなと思います。もう1度申し上げると、食べられないと思うときには初めから少な目にもらうとか、配膳後に余ったものについては、部活動だとかで、本当に頑張っている生徒や食欲旺盛な生徒はもっと多く欲しいと思いますので、そういうときはおかわりができるようにする。修学旅行だとか、魚沼自然教室等の宿泊行事では「おかわり、おかわり」ということでご飯等が足りないという例もよくあります。そういう雰囲気づくりというか、工夫も必要なのかなと思います。

近藤区長

先生がおっしゃっている食べられないものというのは量の話ですね。物の話ではございませんよね。

花岡委員

そうです、量の話です。

近藤区長

これも聞き売りで済みません。ベテランの栄養士が言うには、例えば体育祭の前等、非常に体力を消耗するときは逆に食べないのだそうです。そのときは喉ごしのいいものをつくって食べさせる努力をして、学校行事と子どもたちの運動量に合わせてメニューもきちっと対応しているということもありますが、やはり、来たばかりの方には、まだいろいろ配慮できるところまで気持ちに余裕がないのかもわかりませんし、いろいろ状況はあると思いますので、それはまた伝えておきます。

何かこれ以外のことでございますでしょうか。小中一貫のことやオリンピックのことでも結構で

す。今日のところはよろしいですか。

では、長時間ありがとうございました。いただいたご意見等を取り入れて、大綱の大きな理念の部分と世代別理念の部分、早急に案文を用意させていただいて、またメール等でお送りしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。